

第1回

拉致解決へ中国を巻き込め 田中均氏が「ミスターX」との交渉語る

有料記事

聞き手・鈴木拓也 高橋杏璃 2023年9月17日 11時00分

コメントプラス

箱田哲也さんなど2件のコメント



北朝鮮の金正日（キム・ジョン・イル）総書記が小泉純一郎首相（ともに当時）に対して北朝鮮による日本人拉致を認めてから17日で21年となります。初の日朝首脳会談の結果、被害者5人が戻ってきましたが、その後は1人の帰国も実現していません。

日朝首脳会談に向けた秘密交渉はどのように行われたのでしょうか。なぜ拉致問題をめぐる日朝交渉は停滞しているのでしょうか。そして、どうすれば「解決済み」を主張する北朝鮮を動かし、事態を打開できるのでしょうか。日朝首脳会談の実現に向け、北朝鮮側と秘密交渉を重ねた田中均・元外務審議官に聞きました。



小泉訪朝に向けて秘密交渉を担った元外務審議官の田中均さん=2023年9月11日午後2時46分、東京都港区赤坂1丁目、高橋杏璃撮影

——北朝鮮との秘密交渉は、こういった経緯で始まったのですか。

私は01年9月に外務省アジア大洋州局長に就任し、戦後の懸案として残る北朝鮮との交渉を進めたいと考えました。

当時、首相だった小泉さんに「拉致・核・ミサイルの問題を解決し、朝鮮半島の平和を作りたい。そのために水面下の交渉に臨みたい」と申し上げました。小泉さんは「田中さん、それ、やってよ。しかし秘密厳守で」と言ってくれました。

前任の局長の協議に出てきた「公安関係者」

1990年代前半に中断した日朝国交正常化交渉は2000年に再開しましたが、北朝鮮外務省は「拉致問題は存在しない」という建前に終始していました。彼らには手に負えない懸案であり、交渉の当事者能力はなかったのです。

私の前任の槇田邦彦アジア局長は、交渉を打開すべく、北朝鮮側と接触を続け、公安関係者と称する者が初めて協議に出てきました。

その人物が、私の秘密交渉の相手になりました。



日朝首脳会談に臨む北朝鮮の金正日総書記(右から2人目)と小泉純一郎首相(左から3人目)。左側の奥に座っているのは外務省の田中均アジア大洋州局長(いずれも当時)=2002年9月17日、平壤・百花園迎賓館で(代表撮影) 

——交渉相手は田中さんに本名を明かさず、日本政府内で「ミスターX」と呼ばれました。秘密警察の国家安全保衛部(現・国家保衛省)の柳敬(リュギョン)副部長だったと言われています。

秘密交渉は01年秋に中国の大連のホテルで始まり、約1年続きました。相手は当時の北朝鮮最高意思決定機関である国防委員会の「参事室長」と自己紹介していました。

本当に保衛部の副部長だったのか、確信はありません。北朝鮮の交渉相手は偽名と適当な肩書を示してくることが多いですから。

ただ、交渉を進めるためには、その相手が誰なのかということにあまり意味はありません。当時で言えばトップの金正日総書記に直接、つながっているかどうかが重要です。

そのため、どの程度の実行力を有するのか確認が必要でした。交渉の初めにスパイ容疑で拘束されていた日本人の元記者の解放を要請したら、無条件で釈放されました。

その後、金正日総書記の側近で外交の総責任者と言われた姜錫柱(カンソクチュ)・第1外務次官が同席したこともありましたが、姜氏よりも実態を取り仕切っているという感じがしました。

「けしからん」とだけ言っても帰ってこない

——秘密交渉では最初から拉致問題への説明を求めたのですか。

もちろん、最初から取り上げました。北朝鮮方が望む経済協力や戦後補償は、国交正常化なしにできず、正常化のためには拉致問題や核問題を解決しなければならないとの基本方針の下で交渉しました。

相手は拉致を認めず、「日本は(植民地支配していた戦時下に徴用などで)朝鮮半島から600万人も強制連行した」と言ってきました。

互いの主張は平行線が続きましたが、全体としてギブ・アンド・テイクになるように心がけて交渉しました。あなた方が得るものは大きいと納得させることが大事です。ただ、原則に反した資金提供は出来ません。

彼らのメンツを満たすため、日本の首相が平壤を訪問すると提案し、正常化が国会承認を得られれば、経済協力が提供できることにも言及しました。日本が米国と強い関係を有することが、米国を怖がる北朝鮮を説得する上で効果的でした。

「北朝鮮はけしからん」とだけ言っている、被害者は帰ってこない。その考えは今も変わっていません。



新潟駅に到着した蓮池(旧姓・奥土)祐木子さん、曾我ひとみさん、蓮池薫さん(左から)=2002年10月17日、JR新潟駅 

——首脳会談の結果、金正日総書記は拉致を認め、被害者5人が帰ってきました。だが、その後は進展がなく、未解決の問題として残っています。

首脳会談で国交正常化を目指す日朝平壤宣言を交わし、北朝鮮の核問題を話し合う米朝中日韓口の6者協議につなげました。05年9月の共同声明で北朝鮮は核放棄に合意し、拉致・核・ミサイルの問題が包括的に解決できると私は思いました。

ところが、核放棄の検証問題がまとまらず、米国が金融制裁でマカオにあった金正日氏の資産を凍結し、合意が潰れてしまいました。拉致問題は包括的な形でないと解決できません。

もう一つは、北朝鮮の問題は日本で必ず国内の政治問題になるということです。北朝鮮に強硬姿勢で臨まなければ、「弱腰」との批判を浴びます。世論を気にする政権が、リスクを取れなくなっていることも大きいと言えます。

岸田首相は説明責任を

——岸田文雄首相は今年5月に、日朝首脳会談を早期に実現するため「(岸田氏)直轄のハイレベルで協議を行っていきたい」と表明しました。

発言が実現することを望みたいが、常識的には、首相のあのような発言は、水面下の交渉で8割方、北朝鮮側と何らかの話がついていると考えられます。単に「国内向けの政治的な発言」「人気取りだった」では済まされません。首相は国民への説明責任を果たさなければならないでしょう。



日朝首脳会談を前に握手する北朝鮮の金正日総書記(右)と小泉純一郎首相(ともに当時)=2002年9月17日、平壤・百花園迎賓館で(代表撮影) 

ロシアと北朝鮮の連携は事態をさらに複雑にしていますが、やはり、北朝鮮を動かすには後ろ盾の中国を巻き込むことが重要です。中国は北朝鮮の崩壊は望まないが、非核化は重要と考えています。

北朝鮮はロシアとともに中国の支援強化を期待していますが、中国の最大の外交課題は対米関係であり、米国との関係をさらに悪化させる北朝鮮支援のメリットはありません。

「日中が連携して北朝鮮問題に取り組み、非核化などに道筋をつけることが対米関係の改善につながる」と、中国に持ち掛けてみてはどうでしょうか。そうした外交戦略の絵を描くことが必要です。

だが、今の日本外交は、同盟国の米国や友好国との関係強化にばかり取り組もうとしているように見えます。残念でなりません。(聞き手・鈴木拓也、高橋杏璃)

たなか・ひとし 1947年生まれ。外務省で北米局審議官、経済局長、アジア大洋州局長、外務審議官など歴任。アジア大洋州局長当時、日朝秘密交渉を担う。著書に「外交の力」「日本外交の挑戦」など。

コメントプラス

いま注目のコメントを見る>



箱田哲也 (朝日新聞記者=朝鮮半島担当) 2023年9月17日14時58分 投稿

【視点】北朝鮮との向き合い方、とりわけ拉致問題をめぐる田中均さんの考えや行動に対して、故・安倍晋三氏をはじめ、自称「右」の政治勢力が厳しい批判を加えてきた。

[…続きを読む](#)



藤田直央 (朝日新聞編集委員=政治、外交、憲法) 2023年9月17日17時23分 投稿

【視点】田中氏が外務省の担当局長としてキーパーソンだった2002年の初の日朝首脳会談を、私は外務省担当として取材しました。04年には二度目の会談がありました。被害者や 家族を思う…[続きを読む](#)

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

出所: 朝日新聞デジタル 承諾番号: 23-2646